

運動（遊び）に対する選好と体育に対する選好の関係

村上 太郎^{*1}・與那嶺 倫子^{*2}・石川 勝彦^{*3}

^{*1}九州女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

^{*2}那覇市保育教諭

^{*3}山梨学院大学 学習・教育開発センター 甲府市酒折2-4-5 (〒400-8575)

(2021年10月28日受付、2021年12月6日受理)

要 旨

小学生の体育に対する選好は、運動（遊び）に対する選好とどのような関係にあるだろうか。「マット運動」「鉄棒」「跳び箱」「短距離走」「水泳」「ボール運動」「水泳遊び」「かくれんぼ」「おに遊び」「けいどろ」「ドッジボール」「ダンス」及び運動の領域を取り上げ、1年生から6年生までの児童455名（男児237名、女児218名、平均年齢=8.67歳（SD=1.48歳））に調査を行った。選好の学年差を見ると、多くの運動（遊び）と体育に対して、高学年になるほど選好が低下することが明らかになった。運動（遊び）への選好と体育への選好の関連を検討したところ、1～4年生は競技色の強い運動（遊び）（e.g.「跳び箱」「短距離走」）への選好との関連が強く遊びの運動との関連は微弱であった。一方、5・6年生は競技的運動および遊び的運動にまたがる多くの運動（遊び）が体育への選好と関連しており、運動（遊び）の種目間の区別が消失するとともに、体育と運動（遊び）が混然一体となって認識され、全体として選好が形成されている傾向がみられた。

キーワード：体育，運動遊び，小学生

1. 問題と目的

本研究は児童が自発的に行う運動（遊びの要素が多いものも含む。以下「運動」と表記する）に対する選好と、体育への選好の関係を記述することを通して、運動と体育の選好のギャップと関連性を発達的な観点から可視化することを目的とする。

児童期の運動実施率の変化を見た研究からは、小学校6年間を通じて運動・スポーツの実施率に大きな差は見られないものの、5・6年生になると、男児に比べ女児の実施率が低下する傾向が報告されている（武長、2015）。この性差を生じさせる一つの要因としては、運動やスポーツを家族と一緒にやるかどうかの影響が指摘されている（武長、2015）。

一方、体育に対する選好の学年差を見た研究を概観する。大坪ら（2020）は女子児童生徒の体育授業に対する嫌悪感は加齢とともに増加すること、その理由として「走ることがイヤだ」といった身体を動かすこと自体に内在する要因、「暑さや寒さを感じるから運動するのはイヤだ」「日焼けをするからイヤだ」といった運動に付随する運動外的要因、「仲間外れになるからイヤだ」「優劣がつくからイヤだ」といった社会的要因、「恥ずかしいからイヤだ」といった心理的要因など、多様な要因が影響することを見出している。

体育授業に対する劣等コンプレックスを扱った研究（佐々木・須甲、2016）から、体育授業に対する劣等コンプレックスは運動スキルの劣等性が焦点化されて生じるもの（運動スキル）と、劣等性に結びつく諸要因が焦点化されて生じるもの（心理・社会・身体要因）の2つの枠組みで捉えられることが明らかにされている。そして運動スキルは学校段階の違いに関わらず女子により多くみられること、一方の心理・社会・身体要因は特に男子において小学生よりも中学生に多くみられることが示された。また運動やスポーツ、体育授業が嫌いなこと、さらに体育授業に対する満足感が低いことは、劣等コンプレックスの強さと関係することが示唆されている。思春期が近づくにつれ、自己意識的情動が前景化し心理社会的な要因によって体育に対する選好が低下すると解釈できる結果である。

一方、思春期を過ぎた大学生をみると、運動スキルの不振と運動回避が悪循環を呈していることが報告されている（古田、2018）。このような循環が、心理社会的要因に加え、児童期にも作用している可能性は否

定できないだろう。児童期において、運動嫌いと体育に対する選好は別の問題である可能性もあれば、強く連動している可能性も考えられる。

上述した先行研究は、心理測定尺度を用いて、構成概念としての運動嫌いや劣等コンプレックスを観察し、主観的な運動や体育への選好との関連を検討している。しかし、運動する際には、必ず個別具体的な競技、運動種目、運動遊びが存在する。体育についても同様であり、一言で体育と言っても表1にあるように、多種多様な単元がシステムティックに6年間に配置されている（文部科学省）（表1は文部科学省に基づき筆者が作成）。そのため、構成概念ではなく、個別具体的な種目への選好を取り上げ、運動と体育に対する選好とその関連性について記述することを通して、運動や体育に対するネガティブな傾向の現状把握と解消に向けた具体的な課題発見を行うことが本研究の目的である。

具体的な運動内容として「マット運動」「鉄棒」「跳び箱」「短距離走」「水泳」「ボール運動」「水泳遊び」「かくれんぼ」「おに遊び」「けいどろ」「ドッジボール」「ダンス」を取り上げる。体育については表1にある単元を児童が経験していることを前提に「体育」と一括して取り扱うこととする。なお表1を一瞥してわかるように、本研究で取り上げる12の運動は運動領域にほぼ含まれ、網羅されていることから、運動種目としては同一の内容を扱っていると言える。本研究では、上記の12の運動に対する選好が体育への選好と関連を示すか、学年差に考慮して記述することを目的とする。

表1 小学校の体育単元

大単元	小単元	1・2年生	3・4年生	5・6年生
A体づくり運動	体ほぐしの運動	●	●	●
	多様な動きをつくる運動遊び	●	●	
	体力を高める運動			●
B器械・器具を使つての運動遊び	固定施設を使った運動遊び	●		
	マットを使った運動遊び	●	●	●
	鉄棒を使った運動遊び	●	●	●
	跳び箱を使った運動遊び	●	●	●
C走・跳の運動遊び	走の運動遊び	●		
	跳の運動遊び	●		
	かけっこ・リレー		●	
	小型ハードル走		●	
	幅跳び		●	
	高跳び		●	
	短距離走・リレー			●
	ハードル走			●
	走り幅跳び			●
	走り高跳び			●
D水遊び/浮く・泳ぐ運動	水に慣れる遊び	●		
	浮く・もぐる遊び	●		
	浮く運動		●	
	泳ぐ運動		●	
	クロール			●
	平泳ぎ			●
Eゲーム	ボールゲーム	●		
	鬼遊び	●		
	ゴール型ゲーム		●	●
	ネット型ゲーム		●	●
	ベースボール型ゲーム		●	●
F表現リズム遊び/表現運動	表現遊び	●		
	リズム遊び	●		
	表現		●	●
	リズムダンス		●	
	フォークダンス			●

II. 方法

調査協力者

A小学校の1年生から6年生までの児童全員455名（男児237名、女児218名、平均年齢=8.67歳（SD=1.48歳））に回答を依頼し、全員から回答を得た（1年生96名、2年生77名、3年生99名、4年生45名、5年生72名、6年生66名）。教職課程に所属する大学生が教育実習の際に教育実習先に質問紙の配布回収を依頼した。調査票は各学級の担任を通じ配布・回収された。調査時期は平成29年9月だった。

調査項目

フェイス項目：年齢、学年、性別を尋ねた。

体育への選好：体育という科目への選好を尋ねるため「あなたは、たいいくのじゅぎょうがすきですか」と項目を設定し「好き」「どちらでもない」「きらい」の3択から選択してもらった。

運動への選好：12の運動に対する選好を調査するため「次の運動は好きですか」と設問文を設定し「マット運動」「鉄棒」「跳び箱」「短距離走」「水泳」「ボール運動」「水泳遊び」「かくれんぼ」「おに遊び」「けいどろ」「ドッジボール」「ダンス」の12項目の運動について「きらい」「どちらでもない」「好き」の3件法で回答を求めた。

III. 結果

1. 体育に対する学年別の選好

体育に対する選好の学年差を調べたところ、1・2年生よりも5・6年生の体育への選好が低かった ($F(5.088) = , p < .01, \eta^2_p = .022$; Holm法: $SE = 0.083, t = (3.133), p < .06$; 1・2年生: $M = 2.72, SD = 0.047$; 3・4年生: $M = 2.66, SD = 0.051$; 5・6年生: $M = 2.50, SD = 0.053$) (図1)。

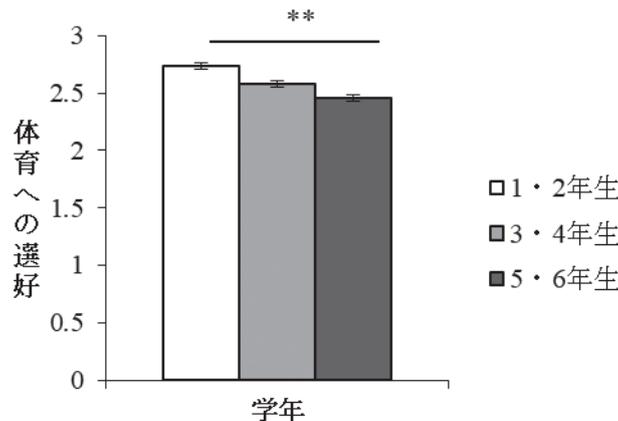


図1 学年別体育への選好（エラーバーは標準誤差）

2. 運動の種類別・学年別の各運動に対する選好

各運動に対する好き嫌いに学年差が見られるか（図2）検討するため、1・2年生、3・4年生、5・6年生の3水準の学年（被験者間）、12水準の運動（被験者内）を独立変数、選好の得点を目的変数とする混合ANOVAを実行したところ、学年の主効果 ($F(11, 423) = 24.68, p < .001, \eta^2_p = .104$)、運動の主効果 ($F(2, 4653) = 39.84, p < .001, \eta^2_p = .086$) が有意であり、交互作用が有意 ($F(2, 4653) = 6.05, p < .001, \eta^2_p = .028$) だった。

交互作用の単純主効果を検討したところ、表2のように「マット運動」「鉄棒」「跳び箱」「短距離走」「水泳」「ボール運動」「かくれんぼ」「おに遊び」「ドッジボール」「ダンス」の10の運動で学年の差がみられた。多くの運動で1・2年生の選好が高く、3・4年生、5・6年生にかけて選好が低下していた。学年の差が

見られなかったのは「水遊び」「けいどろ」だった。

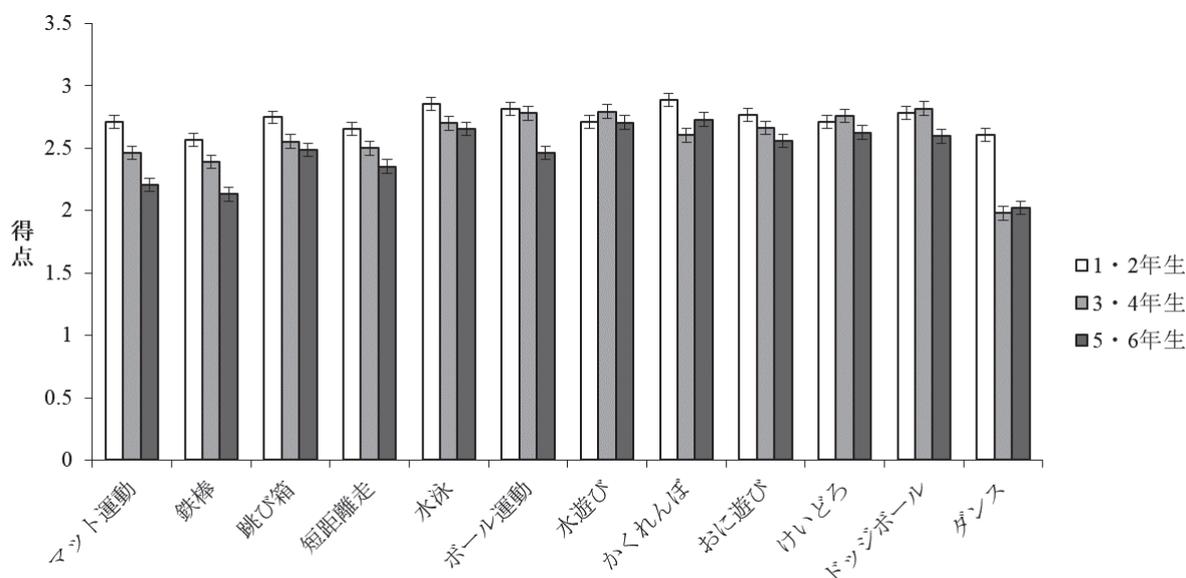


図2 学年別の各運動に対する選好

表2 運動別に対する選好の学年差の検定統計量

	η^2_p	95%CI	F 値	df1	df2	p 値	
マット運動	.095	.048, .147	22.256	2	5076	.000	**
鉄棒	.073	.031, .121	16.612	2	5076	.000	**
跳び箱	.030	.005, .066	6.635	2	5076	.001	**
短距離走	.037	.008, .075	8.124	2	5076	.000	**
水泳	.019	.001, .049	4.087	2	5076	.017	*
ボール運動	.057	.020, .101	12.669	2	5076	.000	**
水遊び	.004	.000, .021	0.862	2	5076	.423	
かくれんぼ	.032	.006, .068	6.996	2	5076	.001	**
おに遊び	.018	.000, .047	3.805	2	5076	.022	*
けいどろ	.007	.000, .028	1.490	2	5076	.226	
ドッジボール	.022	.001, .053	4.693	2	5076	.009	**
ダンス	.172	.113, .231	44.010	2	5076	.000	**

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

3. 体育に対する選好と各運動に対する選好の関連性

本節では、各運動に対する選好が、体育一般に対する選好に影響を与えるか検討する。どの運動への選好が体育一般に対する選好を形成するか、また各運動の選好を説明変数に投入した場合に学年と性別の効果がみられるか検討するため、12の運動、学年、性別を説明変数、体育一般に対する選好を目的変数とする重回帰分析を実行した（表3）。加えて、1・2年生、3・4年生、5・6年生の学年によって、体育一般に対する選好に影響を与える運動が共通するかどうかを検討するため、3学年ごとの回帰分析を併せて実行した。もし正の係数が得られれば、その運動に対する選好が高いほど体育一般への選好も高く、負の係数が得られれば、運動に対する選好が高いほど体育一般に対する選好が低くなることを表す。無相関であれば、運

動が好きであるにも関わらず、体育嫌いの児童が一定数含まれることを意味する。

分析の結果、6学年全体では学年と性別の主効果は有意とならなかった。しかし「マット運動」「鉄棒」「短距離走」「水泳」「ボール運動」「けいどろ」において正の係数が得られた ($\beta = .21 \sim .10, ps < .05$)。これらの運動に対する選好が低い場合、高い場合に比べて体育一般への選好が損なわれることが伺える。

学年別の結果を概観する。1・2年生において、6学年全体と異なる点は「短距離走」「けいどろ」の影響がみられないこと、「ダンス」に正の係数がみられる点である。3・4年生において6学年全体と異なる点はまず、学年の効果が有意であり、3年生よりも4年生の方が体育一般に対する選好が低かった。続いて、「水泳」の効果がなく、「ドッジボール」において正の係数が得られた。5・6年生において6学年全体と異なる点は、「ボール運動」の効果がみられない点であった。

表3 運動を説明変数、体育への選好を目的変数とする重回帰分析

変数名	学年			
	全学年	1・2	3・4	5・6
学年	.04	-.01	-.14 *	-.05
性別	-.06	-.05	-.02	-.10
マット運動	.15 **	.14 +	.19 *	.12 +
鉄棒	.21 **	.20 *	.15 *	.25 **
跳び箱	.02	.06	.01	-.05
短距離走	.19 **	.11	.24 **	.19 *
水泳	.16 **	.13 +	.12	.14 *
ボール運動	.21 **	.32 **	.25 **	.04
水泳遊び	-.02	-.01	.07	.12 +
かくれんぼ	-.01	.03	-.08	-.01
おに遊び	-.02	-.04	-.08	.05
けいどろ	.10 *	-.09	-.02	.28 **
ドッジボール	.06	-.02	.20 *	.01
ダンス	.06	.16 *	.03	.04
R^2	.45 **	.36 **	.51 **	.62 **

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4. 運動の主成分分析

運動を共通する因子に圧縮し、運動の選好の効果をより明確にするため、12の運動を対象に主成分分析を行った。因子数を決定するために対角SMC、MAPを推定したところ、対角SMCは2因子、MAPは1因子を提案した。2因子を指定して主成分分析（直接オブリミン回転）を実行したところ、解釈可能な因子パターンを得た。第1主成分には「ボール運動」「短距離走」「跳び箱」「ドッジボール」「マット運動」「鉄棒」といった従来から体育に組み込まれている運動が集まったため「競技的運動」と命名した。第2主成分には「水遊び」「けいどろ」「かくれんぼ」「水泳」「ダンス」「おに遊び」といった比較的新しい運動遊び運動が集まったため「遊比的運動」と命名した（表4）。因子間相関は、1・2年生で $r = .412$ ($p < .01$)、3・4年生で $r = .286$ ($p < .01$)、5・6年生で $r = .477$ ($p < .01$) だった。

表 4 運動のパターン行列

項目	Factor		共通性
	1	2	
ボール運動	.74	-.05	.53
短距離走	.69	-.04	.46
跳び箱	.67	.01	.46
ドッジボール	.67	-.09	.41
マット運動	.63	.04	.41
鉄棒	.54	.16	.38
水遊び	-.05	.78	.58
けいどろ	.13	.65	.50
かくれんぼ	-.08	.58	.31
水泳	.06	.54	.32
ダンス	-.03	.49	.23
おに遊び	.34	.37	.34
因子寄与	3.12	2.53	
α 係数	.74	.63	
ω 係数	.82	.76	

5. 学年別の重回帰分析

運動に対する選好が体育に対する選好にどのような影響を示すか検討するため、運動の主成分を説明変数、体育への選好を目的変数とする重回帰分析を学年別に行った。性別及び性別と2つの運動の交互作用を投入したところ、全ての学年で競技的運動を好むほど体育を好むこと、5・6年生では競技的運動に加えて遊び的運動が好きでないと体育を好きにならないことがわかった。5・6年生のみ、2つの運動の効果が有意となったことから、5・6年生では競技的・遊び的運動の両方に対する選好をキープしなければ、体育に対する選好が強く失われてしまうことが示唆される。

表 5 学年別の運動の主成分を目的変数、体育への選好を目的変数とする重回帰分析

変数名	1・2年生	3・4年生	5・6年生
性別	.01	-.03	-.14 *
競技的運動	.49 **	.63 **	.42 **
遊び的運動	.02	.05	.37 **
競技的運動*遊び的運動	-.07	.04	-.08
競技的運動*性別	.04	.00	-.01
遊び的運動*性別	-.09	.10	.04
R^2	.29 **	.42 **	.57 **

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

6. 学年別の多次元尺度構成法

主成分分析、重回帰分析の結果を可視化し解釈の妥当性を改善するため、体育への選好、各運動への選好を学年別に多次元尺度構成法にて可視化した。

1・2年生の結果(図3)をみると、運動変数の大きなクラスターが2つ観察される。ひとつには「ボール運動」「短距離走」「かくれんぼ」「ドッジボール」「おに遊び」が集まった。他方のクラスターには「跳び箱」「マット運動」「水泳」「ダンス」が集まった。それぞれのクラスターには競技的運動、遊び的運動がバランスよく包含された。体育の授業は「跳び箱」を含むクラスターの近傍に配置されていることから、当該クラスターへの選好と強く連動することが見て取れる。

重要なことは、2つの大きなクラスターが存在すること、体育の授業は片方のクラスターの近傍に配置されていることであり、このことから、跳び箱を含むクラスターに包含される運動への選好を育てることが体育への選好を形成するうえで効果的であることが伺える。

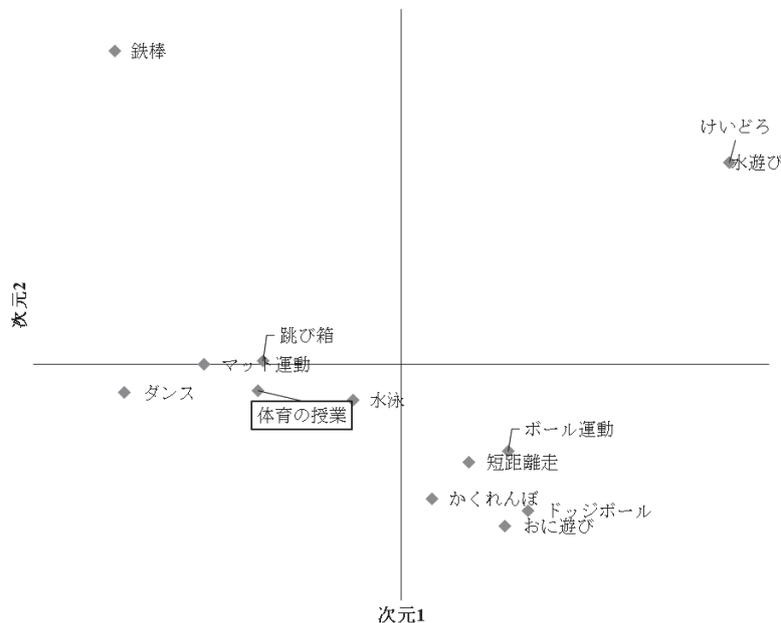


図3 1・2年生の多次元尺度構成法

3・4年生の結果(図4)をみると、運動変数の大きなクラスター2つ観察された。ひとつは「水泳」「水遊び」「おに遊び」「けいどろ」「かくれんぼ」を要素とし、すべて遊び的運動の要素であった。もう一方のクラスターは「跳び箱」「鉄棒」「短距離走」「マット運動」「ボール運動」「ドッジボール」であり、すべて競技的運動の要素であった。体育への選好は「跳び箱」を要素として含むクラスターの近傍に位置していた。

2つのクラスターは1・2年生に比較してより鋭く分離している点が特徴である。またクラスターが遊び的運動/競技的運動の区別に完全に対応していることも特徴であると言える。加えて、体育への選好が競技的運動への選好と強く連動していた。

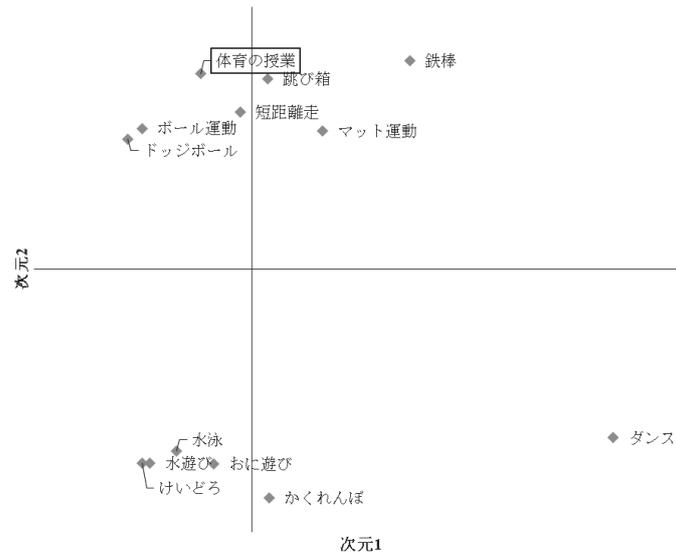


図4 3・4年生の多次元尺度構成法

5・6年生の結果をみると、1・2年生、3・4年生のような明確な運動変数のクラスターは観察されなかった。あえて解釈すれば「かくれんぼ」「水遊び」「水泳」の遊び的運動を要素とするクラスターが観察できる。もう一つのクラスターは「おに遊び」「ドッジボール」「けいどろ」「ボール運動」「跳び箱」を要素とするクラスターが観察可能である。要素は競技的運動と遊び的運動の混合といえる。

5・6年生の体育への選好は、遊び的運動と競技的運動の両者に跨っており、運動全体に対する選好が形成されることと体育への選好が強く連動している姿が伺えた。

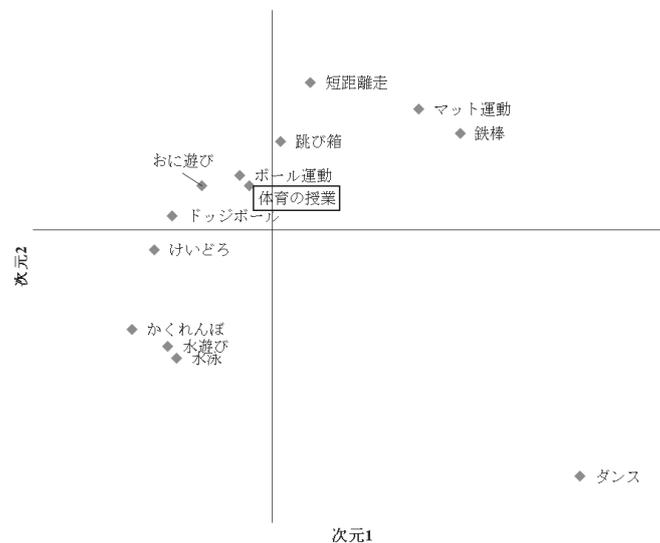


図5 5・6年生の多次元尺度構成法

IV. 考察

本研究は、学年の進行に伴った体育への選好、運動への選好について検討を行った。分析の結果、体育への選好、そして運動の多くの項目への選好はともに学年を経るごとに低下していくことが示された。運動への選好と体育への選好の関係を見てみると、競技的運動への選好はいずれの学年においても体育への選好と

結びついていることが見えてきた。

多次元尺度構成法の結果からは、1・2年生は競技的運動と遊び的運動が比較的近くに配置された一方で、3・4年生では両者が離れていることが示された。このことは3・4年生になると、競技的運動と遊び的運動とは区別された身体運動であるという認識が強まることを示唆する。さらに、5・6年生については、重回帰分析の結果から、競技的運動に加えて遊び的運動への選好も体育への選好に影響を与えていたため、遊び的運動を体育とは独立して楽しむということが難しく、運動が体育と一体化して選好を形成する可能性が垣間見えた。5・6年生は競技的運動および遊び的運動にまたがる多くの運動が体育への選好と関連しており、運動の種目間の区別が消失するとともに、体育と運動が混然一体となって認識され、選好を形成しているといつてよいだろう。前述した体育・運動への選好の程度の低下をあわせて考えると、運動と体育をともに避けようとする強い運動性にとらわれてしまっている回答者が、5・6年生に一定数存在すると解釈できる。

体育の単元(表1)で整理したように、本項で扱った「運動」の多くは現在体育の「運動遊び」の単元に含まれている。体育の授業時間外で行う遊びと体育の単元内で行う運動遊びが同一のコンテンツである一方、選好にズレが生じている可能性が示唆される。

5・6年生は運動に対する選好が直接的に体育に対する選好を予測しており、体育に対する選好が運動に対する選好から独立していないことが示された。児童生徒の運動離れを抑制するためにも、体育をプレイフルな単元に改善していくことが急務と思われる。

現在運動遊びは、子どもから大人まで楽しめるゲーム性を備えた、競技と遊びの両方の性質を備えたスタイルに発達している。鬼ごっこはスポーツ鬼ごっこ(一般社団法人鬼ごっこ協会)として競技化され、加えて、例えばサッカーなどの動的ストレッチや競技モチベーション維持のための運動として導入されている。従来はフリスビーと称されてきた運動は現在アルティメット(一般社団法人日本フライングディスク協会)と名称を変え、競技大会も開催されている。いずれもゲームコートやゲームルールが整備され競技性を高めるとともに、子どもから大人まで新たな楽しみ方が享受されている。

文部科学省によれば、体育にも運動遊びが多く導入されており、遊び的運動と小学校体育の単元には連続性が存在すると思われる。しかしながら、遊び的運動に対する選好は、5・6年生を除いて、体育への選好と関連性を持たなかった。単元外で行われる自由遊びと単元として行われる運動遊びは、コンプレックスや自己意識の関わりからくる嫌悪の生起頻度が異ならざるを得ないと思われる(大坪ら, 2020; 佐々木・須甲, 2016)が、運動種目は同一であることから、単元外で形成されている運動への選好が単元学習と連続性を持つ工夫が俟たれる。

運動を楽しむうえで達成感を感じるために、「うまくやる」ことは重要であろう。近年、運動が苦手な児童生徒に対する優れた指導法の研究が進められている。例えば三井(2013)は水泳中の息継ぎが苦手な児童に対し、陸上で呼吸の練習を行う指導法や、水中で足立したまま呼吸の練習を行う指導法を提案している。井川・岡崎(2020)は支持運動(e.g.動物歩き)、跳躍運動(e.g.ケンケンパ)、リズム・バランス運動(e.g.グーパージャンプ)などのコーディネーション運動のトレーニングを実施することで、10m走や垂直飛びのパフォーマンスが有意に改善されることを見出している。

体育指導の難しさとして、①教科書がないこと、②個別指導が難しいこと、との実感があることが報告されている(西川, 2014)。処方箋として西川(2014)は単元コマの指導目標を明確化することと、「うまくやる」ための指導技法に熟達することをあげている。多忙な体育科目担当教諭の指導力向上のため、児童が単元をうまくやるための、種目指導技法の教諭に向けた習得支援も有効と考えられる。

謝辞

この論文は、第二著者が平成29年度に九州女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻に提出した卒業論文のデータを、第一著者及び第三著者が再分析・加筆・修正を行ったものです。調査の実施にご協力いただきました小学校の先生方、回答して下さった小学生の皆様にご篤く御礼申し上げます。

V. 引用文献

- 古田久. (2018). 運動嫌いと運動不振. 日本教科教育学会誌, 40, 63-69.
- 一般社団法人日本フライングディスク協会. アルティメット.
<https://www.jfda.or.jp/introduction/ultimate/> (2021年9月8日閲覧)
- 一般社団法人鬼ごっこ協会. スポーツ鬼ごっこ. <http://www.onigokko.or.jp/cn15/pg81.html> (2021年9月8日閲覧).
- 井川貴裕・岡崎祐介. (2020). 幼児に対するコーディネーション運動が疾走、敏捷性および跳躍力に及ぼす影響. トレーニング指導, 3 (1), 18-24.
- 三井登. (2013). 幼児期における運動技術の系統的指導にもとづく遊びの方法. 帯広大谷短期大学紀要, 50, 117-125.
- 文部科学省. 小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック.
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1308041.htm (2021年9月8日閲覧)
- 西川潔. (2014). 児童が主体的に学ぶ体育学習の指導に関する実践的研究-器械運動を一例として-. 人間環境学研究, 12 (2), 91-96.
- 大坪健太・春日晃章・濱口あずさ・古田真太郎・南輝良々. (2020). 女子児童・生徒の運動・スポーツおよび体育授業に対する嫌悪感の加齢変化. 教育医学, 65 (3), 211-216.
- 佐々木万丈・須甲理生. (2016). 体育授業に対する劣等コンプレックスの因子的概念と児童生徒の主体的要因との関連. 体育学研究, 61, 663-680.
- 武長理栄. (2015). 子どものスポーツライフに関するジェンダー分析-4-9歳/10代のスポーツライフに関する調査2013より-. スポーツとジェンダー研究, 13, 69-78.

Relationship between preference for exercise and preference for physical education

Taro MURAKAMI^{*1}, Rinko YONAMINE^{*2}, Katsuhiko ISHIKAWA^{*3}

^{*1}Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

^{*2}Naha city Childcare Teacher

^{*3}LED center, Yamanashi Gakuin University

2-4-5 Sakaori, Kofu-shi, Yamanashi 400-8575, Japan

Abstract

This study empirically examined the relationship between preference for physical education and preference for exercise (play) in elementary school children. 455 children (237 boys and 218 girls) from grades 1 to 6 were asked about their preferences for "mat exercise," "bars," "jumping box," "short-distance running," "swimming," "ball exercise," "swimming play," "hide-and-peek," "oni-play," "keidoro," "dodgeball," "dance," and for physical education in general. The results showed that the preference for most physical exercise and physical education decreased in the upper grades. And, in grades 1-4, the relationship between the preference for physical education and the preference for competitive physical exercise (e.g., "jumping box" and "short-distance running") was strong. On the other hand, in grades 5 and 6, the preference for competitive and playful exercise was related to the preference for physical education, indicating a tendency for physical education and exercise to form a mixed preference.

Keywords : physical education, playful exercise, elementary school children